

# 富大考古通信



第 22 号

## 「見えないもの」をみる

2017年に入ってから話題作をたて続けに鑑賞した。その一つがマーティン・スコセッシ監督、遠藤周作原作の『沈黙—サイレンス—』である。

江戸時代初期の17世紀、幕府による厳しい弾圧下の長崎において、キリシタンの受難と宣教師の棄教を描いたものである。特定の信仰をもたない私にとって、ここまで信念を貫き通すことがなぜできたのか、また信じるとは、信仰とは何かということを深く考えさせられる作品であった。

さて、キリシタンといえば、「日本におけるキリスト教文化の痕跡を考古学的手法に基づいて研究する分野」であるキリシタン考古学がある（今野春樹 2013『キリシタン考古学—キリシタン遺跡を掘る—』ニューサイエンス社）。長崎県では教会跡や関連建物、また島原の乱の舞台となった原城跡など多くの発掘が行われており、キリシタン大名として名をはせた大友宗麟の拠点である大分県でも大内氏館跡などを中心に建物や墓地の調査がすすんでいる。また、織田信長の庇護の下、イエズス会が建設した京都府南蛮寺跡やキリシタン大名高山右近の居城である大阪府高槻城におけるキリシタン墓地、江戸城外堀内側に位置する東京都八重洲北口遺跡のキリシタン墓地などの重要な調査がある。この他、特徴的な形状で、十字架や洗礼名、没年が刻まれた墓碑、またメダイやロザリオ、十字架、十字文瓦のようなキリシタン遺物の研究を通して、日本におけるキリスト教の伝播と浸透の実態が明らかになりつつある。

キリスト教の伝来以前は仏教が中心だが、さらに遡って古墳時代以前の信仰や祭祀に関しては玄界灘に浮かぶ孤島で、対馬海峡を渡る際の航海の目印にもなったと考えられている福岡県沖ノ島祭祀遺跡が有名である。また、生活上不可欠で清らかな水が湧出する場所での水辺の祭祀、山や峠の祭祀、古墳や集落内でのさまざまなカミ祀りが各土地で行われた。

古来、人は特異な地形や自然現象を通じて「見えないもの」に畏怖、畏敬の念を感じとり、自然そのものをカミとして崇めた。さらに、神格化したカミやホトケを偶像化し、それらを祀るための器物をつくり、また納めるための建物を築き上げ、「見えないもの」をあたかも見えるようにして崇拝した。

これらは、土地に建物や墓碑、墓、カミ祀りの遺構や、また信仰や祭祀に関わる遺物が残されたからこそ考古学的な調査、研究が可能になるわけだが、もしもその場所に何も残されていなかったら、あるいはあっても気付かなかっただら、考古学的な証明が難しくなってしまう。まさに沈黙せざるを得ないのである。また、たとえ遺構や遺物が見つかったとしても、考古学ではそれらの背後に人の心を直接みることはほとんどの場合できない。あくまでも、ものを通して間接的に人の心の中を推察するわけである。考古学から信仰の世界を探ることの難しさや限界を知り、それと同時に宗教学や文献史学、民俗学などの他分野の研究を取り入れることが如何に重要であるかをあらためて認識できたのでよかった。

映画では隠れキリシタンの村が舞台であったが、弾圧を逃れるため十字架などが徹底的に

隠された場合、信仰の存在自体を考古学的に証明することすら難しくなる。弾圧にあっても信念を貫き通し、信仰を捨てなかった、もっとも熱心な信者とも言える人たちの存在を解き明かすことができないもどかしさを考古学に感じた。

だが、ふと新聞を検索すると、長崎市出津集落から潜伏キリシタンとみられる人骨が発見されたという記事を見つけた。なぜそう推定できたのか？ それは潜伏キリシタンの村という伝承もさることながら、「頭を（ローマがある方向とされた）南に向け、膝を曲げて寝かせていた」という言い伝え通りの埋葬状況であったとのこと。また、2014年に切支丹屋敷とされる東京都小日向一丁目東遺跡で発掘された人骨が、ミトコンドリアDNA鑑定等の結果、禁制下に日本にわたり捕えられ、新井白石が尋問したイタリア人宣教師ジョバンニ・バチスタ・シドッチ（1668～1714年）と確認され、最近復顔も実施されたとのこと。考古学でしか分からないこと、考古学の可能性を感じさせるニュースであった。

（高橋 浩二）

## 目次

「見えないもの」をみる

高橋浩二

### 卒業論文要旨

「石川県における縄文時代後期から弥生時代にかけての打製石鏃の一考察」

北岡さゆり

「鳥取県青谷上寺地遺跡からみる、弥生時代中期から後期にかけての山陰東部と北陸西部間の交流」

牧本一輝

「近世江戸における地下室遺構普及の考察」

進藤 久実

卒論発表会と追いコンのお知らせ

編集後記

## 卒業論文要旨

### 石川県における縄文時代後期から弥生時代にかけての打製石鏃の一考察

北岡さゆり

打製石鏃は縄文時代草創期に出現して以来、弥生時代においても鏃として使用されてきた。しかし、縄文時代の打製石鏃は狩猟用具としての性格をもつものに対し、弥生時代は戦闘用武器としての性格が加わるようになる。それは弥生時代の打製石鏃が縄文時代のものに比べ、長さ・重量の面で大きくなっていること、それらの多くが細長い形態、すなわち対象物に突き刺さりやすい形態をとっていること、さらに畿内地域を中心として防衛的性格をもつ高地性集落の出現とともに大量化していることからそう考えられている。

打製石鏃が戦闘用武器として使われていたという研究は、西日本を中心に行われており、近畿地方以東の地域における研究はあまりなされていない。また、東日本では打製石鏃の大型化が明確でないという指摘もあり、縄文時代の延長的な様相とみられている。そこで本論では、西日本と東日本の中間地に位置する石川県において、打製石鏃が戦闘用武器として使われ始める時期の特定と、戦闘用石鏃が増加する原因についての検討を行った。

分析方法として、打製石鏃の長さ・重量、長さ・幅の比較を行うこと、形態変遷を追うことにより、狩猟用具から戦闘用武器に変化した画期を捉え、その背景について考察する。対象資料は近年発掘された遺跡も合わせ、石川県下の 16 遺跡、336 点である。

分析の結果、弥生時代中期前葉までの凸基式・有茎式は、出土量が少ないうえに、幅の広い小型の狩猟用と思われる形態が主体を占めていた。しかし、弥生時代中期中葉の段階になると、凸基式の出土量が急増すること、凸基式・有茎式の主体となる形態が細長い大型の戦闘用石鏃となることなど、弥生時代中期中葉に凸基式・有茎式の様相に変化がみられた。弥生時代中期中葉は拠点集落が勢力を拡大した時期であると考えられる。以上のことから、勢力を増した拠点集落が戦闘用石鏃を必要としたために、弥生時代中期中葉に戦闘用武器とされる形態の打製石鏃が増加したのだと考えられる。

また、石川県における弥生時代後期は集落の分布密度が高くなる時期である。しかし、当該期の打製石鏃の出土量は前段階のものよりも減少していることがわかった。石川県において銅鏃や鉄鏃が弥生時代後期には出現していること、弥生時代後期以降の打製石鏃は小型で幅広い形態をとることが多いことから、後期以降の打製石鏃は、金属鏃の補助的役割、特に狩猟用具としての役割を担っていたと推測した。

今回の研究では、石川県下の弥生時代前期は発掘された遺跡が少ないことから石鏃の資料も少なく、縄文時代から弥生時代へと移行する時期の様相を明らかにすることができなかった。その上、他の地域や遺跡ごとの比較も行うことができなかった。これらの点を今後の課題としたい。

鳥取県青谷上寺地遺跡からみる、弥生時代中期から後期にかけての  
山陰東部と北陸西部間の交流

牧本一輝

青谷上寺地遺跡は、鳥取県鳥取市青谷町青谷および吉川に所在する弥生時代前期後半から古墳時代前期を中心に営まれた集落遺跡である。当遺跡からは、土器や木製品、金属器、玉類など国内各地や中国・朝鮮半島との交流がうかがえる遺物が出土していることから、「交易拠点」としての役割を担っていたことがうかがえる。

今回、交流の対象地域を北陸西部に据えた。かねてより山陰（東部）と北陸（西部）とは四隅突出型墳丘墓や布堀建物などの遺構や土器などの遺物から関係性がみられており、青谷上寺地遺跡の調査によってさらに管玉製作と木製容器からも関係性がみられることが明らかになっている。そこで本論では、青谷上寺地遺跡を中心として、弥生時代中期から後期にかけての山陰東部と北陸西部間の交流の様相について複合的な視点から検討を行った。

分析方法としては、青谷上寺地遺跡の調査で出土した管玉の製作技法と石材、木製容器の製作技法と形態を、山陰東部、北陸西部、さらにその中間の近畿北部の3地域で比較した。時期設定は各地域の土器編年を参考に併行関係を作成し、それを基にした。

結果として、管玉製作は、緑色凝灰岩とA技法の組み合わせが弥生時代前期後葉から中期前葉の前半にかけて山陰から北陸へ波及していくことを確認し、「菩提系碧玉」とB技法の組み合わせが弥生時代中期前葉の後半から中期後葉にかけてみられることを確認した。

「菩提系碧玉」の原産は北陸にあると考えられているが、B技法による管玉製作に関しては、山陰東部・近畿北部と北陸西部で製作工程に差異がみられることから、従来考えられてきた、石材と技法がセットで北陸西部から山陰東部に伝わる可能性は、低いと考えられ、山陰東部の管玉製作は、青谷上寺地遺跡が北陸西部から石材を入手し、素材を近隣の遺跡へ分配していたと考える。木製容器に関しては、中期後葉に青谷上寺地遺跡出土例と類似する高杯の脚部と桶形容器が石川県内で見られ、後期には花卉高杯が青谷上寺地遺跡の他、兵庫、石川県内でも見られたが、成形方法や樹種に差異が見られることから、製品ではなく、意匠の伝播があったと考える。

また、山陰東部、近畿北部、北陸西部の土器の様相を見ると、中期前葉には櫛描文系土器、中期後葉は凹線文系土器、後期には擬凹線文系土器や台付装飾壺などと言う様に、土器の波及するルートや方向が管玉製作(A技法)、木製容器の交流ルートと共通している事を確認した。この事から、山陰東部と北陸西部の集団が、時に近畿北部を経由しながら弥生時代中期には管玉製作や土器、中期後葉から後期には木製容器や土器などを通して交流をしていた事がうかがえる。

今回の研究では、交流の社会的背景について触れることが出来なかった他、弥生時代中期に見られるB技法による管玉製作の起源について追究することが出来なかった。また、先行研究より補った点が多く、これらの点を今後の課題としたい。

## 近世江戸における地下室遺構普及の考察

進藤 久実

地下室とは、文献には「穴蔵」とも呼ばれている。その名の通り、地下に設けられた貯蔵庫である。地下室の出現は中世の貴族の日記、甘露寺親長著『親長卿記』の文明 10 年(1478)12 月 25 日の条に、火事の際、穴蔵に具足等を収納したという記述で見ることができるとともに、また地下室は昔から貯蔵庫であると共に、火災時の家財道具の緊急避難場所、つまりは防火の役割を担っていたことが史料から分かっている。それは火事が頻発していた近世江戸でも同じことが言える。そして近世江戸における地下室の普及に関しては、今までの地下室研究の中では、「明暦の大火(1657 年)」を契機とした説が有力であったが、研究が進む中で、その説を疑問視する声も上がっていた。

そこで今回は 様々な形態の地下室をまとめて扱い、遺構の立地、形状、所有者の身分等を総合的に検討して地下室の変遷を明らかにすると同時に、江戸時代における様々な事柄と照らし合わせて、地下室普及の背景について検討を行った。

今回の研究では江戸城が置かれていた千代田区の 3 遺跡と共に、近世江戸の範囲として当時定められた「江戸朱引図」の範囲内にあり、かつ、朱引きの内側、支配する管轄が町奉行へと変わる「墨引(内側の線)」との境界線が区内にある新宿区の 7 遺跡の地下室を調査の対象とした。

分析の結果、台地と低地という立地の違いからは、地下室の種別に台地においては関東ローム層の天井を有する素掘りの I 群から、天井のない開放型の IV-2 類へと変遷するのに対し、低地においては木枠を有する IV-1 類が全時代を通して共通しているという違いがみられた。また墨引内か外かという違いからは、墨引内の地下室に少数ではあるが麴室とされる II 群の地下室があり、町人との関わりが密接である地下室が存在すること、墨引外の地下室が農作物の貯蔵庫として利用された可能性の高い IV-2 類ということから、都市的構造と農村部という対比を見て取れた。また、所有者の身分の違いにより、大名屋敷から旗本屋敷へと土地所有者が移り変わった遺跡の地下室は大規模で少数であったのが、小規模で多数という変化をたどることが分かった。

以上の分析結果と、江戸火事、水害の起きた時期を比較したが、明暦の大火を画期として地下室が普及したというには地下室の出現する時代が遅く、明暦の大火が地下室普及の契機であるという説はやはり疑問が残る結果となった。また、調べた遺跡の地下室の大部分に関して、明確な地下室の普及の画期を捉えることはできなかった。しかし、地下室の I 群から IV-2 類への形態の変化を見て取れたことにより、地下室がしだいに防災施設ではなく、日常的な収納施設として普及していったため、災害を画期として普及するあり方に変化が生じたのではと考えられる。

今回、災害という一面でしか地下室を比較できず、多くの種類の地下室を一度に取り扱ったことで普及の面では成果を得られなかったことを今後の課題としたい。

## 平成 28 年度富山大学考古学研究室卒業発表会

日時：2017 年 3 月 4 日（土）13 時 30 分～

場所：富山大学人文学部 1 階 第 1 講義室

当日のスケジュールは以下の通りです。（順番が入れ替わることがあります。）

聴講は無料で、申し込みは不要です。皆様ふるってご参加ください。

お問い合わせ等がございましたら 076 - 445 - 6195（富山大学考古学研究室）もしくは  
tomidai\_kouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。

### 【卒業論文】

- ①北岡さゆり「石川県における縄文時代後期から弥生時代にかけての打製石鏃の一考察」
- ②牧本一輝「鳥取県青谷上寺地遺跡からみる、弥生時代中期から後期にかけての山陰東部と北陸西部間の交流」
- ③進藤 久実「近世江戸における地下室遺構普及の考察」





## 編集後記

寒さ暑さも彼岸までと申しますが、まだまだ寒い日が続いております。

2月も終わりに近づき、そろそろ春の足音が聞こえてまいりました。春は先輩方とお別れをする季節、そして新しく2年生を研究室に迎える、うれしくも寂しい季節です。

卒業される先輩方は、富大考古通信に原稿を提供していただきありがとうございました。

これから困難も多いかと思いますが、しっかりと自らの道を進んでいかれることをお祈りしております。

今年の春からは、2年生が2人入ってきます。新しい仲間を迎えて、研究室がますます楽しく、そしてみんなで協力して学ぶことができる場となるよう、一同頑張っまいります。

(浦口日捺・大上立朗・松永七星)

富大考古通信 第二十二号

配信日 2017年2月22日

編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室

住所 930-8555 富山市五福 3190

TEL 076-445-6195

留守番アクセス 4000 BOX 番号 6195

HP <http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/kouko/index.html>

メール [tomidai\\_kouko@yahoo.co.jp](mailto:tomidai_kouko@yahoo.co.jp)

※メールにつきましては、迷惑メールと識別するため、タイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力してください。ご協力お願いいたします。